

また「一〇九連隊会報」を発行し、親睦を計っている。会報が縁で生命の恩人、当時の独立山砲第二二連隊第一大隊長平原大尉から丁寧なお電話を頂き恐縮し感激した。

私は今、細々ながら平和で元気に暮らしているが、遠く雪峰山系奥深く散華された英霊の冥福を朝夕、祈っている。

常德作戦

愛知県 熊本久夫

私は、大正十一（一九二二）年三月三日名古屋市昭和区曙町で生まれました。

昭和十八（一九四三）年二月十日、福井県鯖江の歩兵第二十八連隊へ入隊、約一週間経て列車で下関、釜山、朝鮮、満州、山海関、徐州、蚌埠を経て盧州へ到着、この地で一期の教育を受けました。

二月十日鯖江へ入隊する当時の私の家族は

父 健在 無職

母 〃 〃

本人 〃（養子）名古屋の航空機製作所勤務

ということでした。

入隊の日は町内のお宮さんへ集まり（同じ学区で二人）ました。家を出る時父は「身に気をつけて頑張れ！」との短い挨拶でした。母はただ黙ってハンカチをあてた目を半分私に向けていました。

駅までの道中は在郷軍人会、婦人会、町内有志、学童に見送られて、日の丸の旗の波に励まされて車中の人となりました。

私の従軍期間約三カ年余り、支那大陸戦線での労苦の最たるものを回顧すると、やはり「常德作戦」に尽きると思います。とにかく在支米空軍に制空権を完全にとられ、昼間の行動は百パーセント不能、夜間行動を終始つづけ、疲労は極度以上

であった。よくもまあ、生還できたものと思し議にも思われます。夜間行動は企図の秘匿と対空被害の減少につとめる。

常德作戦の目的と云えば、支那軍のビルマ進攻を牽制するための陽動作戦であると。第三、第三、第三百十六、第六十八、第四十の各師団と、我が柄田支隊を加えた第十一軍指揮下の精鋭部隊であった。柄田部隊は石門、新安付近を確保し、軍の右側背を掩護する任務であった。

第一期作戦 「略」

第二期作戦 「よ号作戦」

常德攻略の概要

南から歩兵第六連隊（中畑部隊）、北から歩兵第九連隊（布上部隊）、次いで歩兵第三百三十三連隊（黒瀬部隊）、西から歩兵第二百二十連隊（和爾部隊）、東から独立歩兵第六十五大隊（西山大隊）、ややおくれ戸田部隊第二大隊（土屋大隊）

が加わり、各方面から猛攻した。

攻撃は昭和十八年十一月二十五日二十四時を期して行われ、その直後から攻撃部隊は岩永第一百六師団長が統一指揮した。

中畑部隊は二十五日夜半、沅江を渡河して城壁の東南角を奪取、二十八日まで同地付近で死闘を繰り返しつつ、戦果の拡張につとめた。

北方面は最初布上部隊が攻撃して北門外に達したが場内には突入できず、黒瀬部隊が加わり猛攻し、ようやく二十八日朝、北門から突入した。

二十八日敵の退路解放の意味をもって、中畑部隊は一部を城壁東南角に残置し、北門方面に転進を命ぜられ同夜半、主力は北門に転進、二十九日朝北門より城内に進入した。西から和爾部隊が攻撃したが、一部はようやく末期に突入できた。

城内の市街戦においても敵の抵抗は頑強を極め、十二月二日朝ようやく掃蕩を完了し、和爾部隊主力も大西門から突入した。

次に常德南方地区に於ける敵第十軍殲滅作戦に

ついで——常德攻略戦が行われている間、常德南方地区に於いては、長沙方面から常德救援にきた敵第十軍を我が第三、第六十八の両師団が邀撃して、これを殲滅した。以下略。

第三期作戦

総司令部は本作戦より、重慶方面に転進を企図してきた敵中央軍のうち、当方面に牽制されたるものが少ない状況なるも、敵のビルマ反攻は容易に開始できないと観察されるので、常德を攻略せば一応本作戦の目的は達したものと判断し、第十軍をして適時常德を撤退させるに決し、既に十一月二十一日要旨次のごとき派遣軍令を下達していた。

「第十一軍司令官は常德付近の敵軍事拠点を覆滅せば適時、原態勢に復帰すべし（以下略）」

反転開始作戦の終結

澧水南岸地区の第十一軍においては、十二月十

四日来、各師団の前面にそれぞれ数百の敵の出撃を見たが、各師団の一部を以て機先を制し、逆襲これを潰走させていた。

軍は松井総参謀長との連絡に基づき、十二月十七日夜各兵団に対し「軍は十九日夜行動を開始し、松滋河右岸地区に転進を準備すべき」を内示し、次いで十八日「原態勢に復帰すべき」派遣軍命令を受領するや反転の開始を命じた。各兵団は二十一、二十二日頃それぞれ松滋河岸地区に達した。

次いで原態勢復帰に関する命令に基づき、第十三師団の掩護の下船舶部隊の協力により、二十三、二十四日頃に揚子江（長江）を渡河し一月初頭それぞれ原駐地へ。私の柄田支隊は漢口に十日程駐留して、一月中頃に徐州へ帰還し本作戦は終了した。

先に述べたようにこの作戦の一つの特徴は、行動がすべて夜間であった。軍の作戦計画によると「集中及び展開はすべて夜間行動とし、企図の秘

匿と対空被害の減少に努める」(これは江南殲滅作戦末期から激化した敵空軍の対地攻撃の体験から)。歩兵は文字通り歩く兵隊である。くる日もくる日も行軍また行軍である。夕方うす暗くなると出発し一晩中歩き通し、明けの明星を眺め辺りの景色がぼんやり見えてくる頃宿営である。完全に昼と夜と逆転の生活が続く疲労も一段と重なる。寒い夜雨に降られながらの行進でドロドロになったり、十五分休憩の命令に所かまわず坐りこみ、あるいはヒツクリ返り寝込んでしまう。出発の声に起き上がると四十五分も過ぎている。歩哨を残し皆寝込んでいた、との裏話は尽きない。

さて、私達の部隊は常德作戦参加のため、昭和十八年十一月三日、徐州出発後津浦線を甬口へ南下、揚子江を船(約千トン位)で遡航、途中敵機の来襲に備え、安慶及び九江にて下船夜間に航行、漢口到着後、第十一軍の配属下に入り、第四野戦鉄道で終点まで、その後輜重(しじゅう)のトラックで第

一線基地沙市を目指し急追、令下部隊に編入され、息つく間もなく今度は行軍で右門を目指す。

十一月十日頃早朝、揚子江を渡河し、作戦地域へ出発。途中野戦兵器廠に寄って、弾薬の補給、食糧も二倍以上を身につけ出発、最初の一日で落伍者続出、約六十人位この人達は後方へ転送、それ以後は強兵で落伍者もなく連日の強行軍。漢水を渡り沙市を目指す。沙市は長江沿岸では最大級の都市といわれている。屈曲の多い堤防上を行く。チクチク痛む足を引きずりながら夕方、野戦病院のある町に着いた。ここで野営する。靴を脱いでマメの治療をする。驚いた。マメの中に更に新しいマメが出ている。それでも歩かなければいかん。もう死んだ方が……と。

翌日夜行軍の伝達あり。日もとつぷり暮れ、暗夜の行軍。道は畑道位の幅。行軍も思うにまかせず。五く六日の討伐はあつても軍作戦の参加は初めてのこと、畑に落ちたり、軍馬がひっくり返ったりの散々であつた。夜明け頃小休止。出発後今

日は早目に宿営すると伝達があつた。部落に着き
炬を造る者、薪を集める者、夕食の支度をする
者、皆それぞれの作業をする。食事がすむと夜行
軍の疲れでグッスリ寝てしまった。朝目覚めると
同行の苦力（支那人の青年）が居ない。夜の中に
逃げられてしまった。重い荷物運搬を無理矢理さ
せられていたので無理もない。行軍を始めてから
「雷家舗」という部落で小休止（この雷家舗が後
日になり我が支隊の常德作戦中、最も激烈な戦闘
地になろうとは誰も思わなかつた）。

軍命令で「石門に進出、警備せよ」。一夜明け
て石門目指して出発。一人歩くのがやつとの細道
を進む。途中道路上に樹木が切り倒されバリケー
ドになっている。ふと側方の窪みへ目をやると、
支那兵らしい服装でも既に白骨化した死体が二つ
三つ転がっている。新安の街に着き小休止。街の
左側に澧水河が美しい流れを見せている。街を出
て水のかれた河原を渡り丘陵地にさしかかる頃、

後方で「ドカン！」と大きい爆発音がする。

後方より「地雷にやられた。兵一人と馬一頭死
亡す」と伝達あり。それより前進はおっかなびつ
くり、なお石門を目指す。ほどなく石門到着。街
の入口で警備残留の部隊が出迎えてくれる。石門
は湖南省石門県政府のある街で、大きく左側に澧
水が流れ、右後方は山が奥地へ続き、通商上の拠
点。

石門に着いて二日程たった頃、軍命令により
「柄田支隊は一個小隊を残し澧水を渡河、常德方
面（羊毛灘）に誘導作戦に進出すべし」の命令
で、渡河も終わり隊列を整えている頃、突然米軍
機P 51、二機急降下機銃掃射を加えて来た。斎藤
副官は馬上で被弾し戦死。遺体は街中の敵の司令
部跡らしい建物の庭の大樹の下に埋葬、片腕を火
葬にして安置する。後方の山上の敵より射撃が多
くなってきたので、大隊砲で反撃、照準よろしく
一発で敵陣は吹き飛んだ。

翌朝、石門後方敵陣討伐の命令により、出動準備、黎明攻撃のため四時頃より行動に入る。夜も白々と明ける頃、敵も我が軍の行動を察知したか、四、五発山上より射って来た。雑木林の山腹を這い上がり山頂に近づく。右のトーチカ内からも盛んに射ってくる。これを包囲するように各隊が異動する折、幸部隊の山砲陣地より支那兵と見間違えたのか発砲してきた。早速信号を上空に打ち上げ味方である事を知らせる。

「重機射て！」の命令でトーチカ目がけて二機の銃が火を吹く。前進の命令で一〇〇メートル先のトーチカへ突撃、敵が逃げ出し、トーチカに火をかけ焼く。

常德攻略と時を同じくして、敵も日本軍後方攪乱目指し、重要拠点たる石門攻撃に必死で、その頃敵は一個師団位に増強しており、付近の高地、殊に北の高地は全部敵の手中にあった。敵の射撃は熾烈をきわめ我が各隊の前進意の如くならず苦しんでいた。MG（重機関銃）が射ち出してから

各隊の攻撃も漸く軌道にのり、敵に相当な損害を与え、敵に反攻の暇を与える時間がないよう早々に引き上げる。

第三回の攻撃では夜半、野々垣中尉以下の二個小隊が尖兵となり、途中敵の前哨線を突破、進むうちに攻撃が敵に知れ、尖兵分隊は手榴弾や軽機で攻撃を受け突撃は頓挫する。尖兵中隊はそのまま敵と対戦、本隊は敵主陣地と同高位にある西の台地を確保、重機で射撃開始す。MG西村小隊長自ら先頭に立ち白刃を振りかざし突撃、同時に他隊も突撃、敵を急追し相当の戦果をあげた。

その頃、軍の主力は常德を二方向猛攻、第六十六師、第四十師、第六十八師は正面、第三師、第十三師の二個師団は南方より、救援の敵十万以上を受け止め、一步もゆぜらず、三日位猛攻の末、常德城を占領した。第百十六師団は連隊長、大隊長はじめ戦死者多数にのぼり兵力半減の状況と聞いた。

反転作戦

敵は石門及びその付近へ兵力を増強し攻撃してくる。石門南方一五里位にある羊毛灘付近でも四個大隊主幹の佐々木支隊が敵の包囲を受け、行動意のごとくならず、柄田支隊が応援突破の命を受け、十一月三十日頃渡河救援に向かう。二日目は敵と遭遇せず、翌早朝宿营地を出発、一時間程前進した頃、尖兵中隊の野々垣隊は有力な敵の猛射を受け行動不能となった。

敵主陣地と田圃を挟んだ高地へ進出、立木の枝が邪魔をして砲が射てぬため、各中隊は擲弾筒てきだんしゅうの一斉射撃を十分位実施の後、部隊長指揮のもと突撃を敢行、日暮れ時には完全に包囲を突破、夜に入り敵より離脱を計る。

この戦鬪を「浮立山付近の戦鬪」という。翌朝、石門目指して急ぐ午前九時頃、敵は我が軍を急追中を確認、昼頃まで戦鬪が続いた。昼過ぎ石門に到着。残留隊と合流する。

十二月初め、最初第三師団の配属下に入り反転

の先頭で楽であった。途中より第十六師団へ配属替えとなり、反転の要点である雷家舗付近確保の命を受け、敵方へ二里程逆戻りした。既に付近は敵の手中にあるので、部隊を展開部隊長指揮のもと斬り込み攻撃をし、明け方までに部隊位置まで戻ってくる。

本部残留兵が警戒布陣していると、足音が聞こえては消えてしまい、帰着時間はとつくに過ぎていく。心配していると、また、足音が聞こえてくる。「誰たれ何なに」すると部隊長以下の斬込隊であった。翌日の昼頃まで小康状態が続いた。午後より敵は前にも増して猛攻を加えてきた。我が方の負傷兵も多くなり、各隊の陣地確保が相当厳しくなり、彼我入り乱れての激鬪の二日目も終わった。

その夜十時頃、陸軍中尉の服装をした大西と名乗る将校が単騎近寄り連絡に来たと話し、柄田支隊の今後の予定をたずねた。歩哨が反転の話等をして、詳しくは本部で聞くようにと言うと、友軍の佐々木支隊のいる方向へ去った。戦場へ正装で

来ること自体あやしく、すぐ本部に連絡する。日本人で敵の戦力になっているのを初めて見た。

各中隊の陣地も突破される寸前である。部隊長は決意をされ、予定を早めて反転命令を下し、三日目の午後一時頃より反転開始。各隊は配属のMGと軽機とで交互に猛射交互に反転、約五時間、その間に負傷兵の担架を運びながら敵と交戦、約二キロ後退、夕方六時頃二つ目の部落まで追いつめられた。その頃第五中隊長（弓場隊）の命で簡易陣地を構築していた正面前方から小銃、重機関銃、砲の音が彼我入り乱れ聞こえていた。しばらくすると前方の稜線にチラホラと敵兵の姿が見えるようになった。三〇〇〜四〇〇メートル前方に近づいた敵に、小銃、重軽機、擲弾筒が一斉に火をふいた。敵の攻撃も熾烈を極め、特に迫撃砲の威力は凄く戦死、負傷も多数にのぼった。

反転を始めると敵の攻撃は激しさを増した。支隊長は第五中隊の弓場中尉指揮の一個分隊の斥候

を出発させた。約一時間後捕虜一人を連れて帰隊した。報告によれば敵は有線電話を引きながら支隊包囲の態勢をつくりつつあり。我が斥候は敵の通信班を急襲しその一人を捕虜とし、通信線を切断して来た。

支隊本部は直ちに通訳を通じて捕虜を調べた結果、敵包囲部隊は約一個師団で、日本軍はこの包囲を脱出できぬと言う。歩哨線の件、通信兵捕虜の話、敵の攻撃の激しさ等から考えると、我が支隊の反転を察知した敵の行動と判断。支隊長は反転予定時間を早めねば脱出不可能と決意、早速全員反転命令が出され、部隊はそれぞれの行動に移った。反転のための尖兵は敵通信線の切断地点に部隊を誘導し、後衛中隊は追尾する敵の攻撃に反撃を加えつつ撤退を繰り返しながら包囲網を脱出した。

十七時頃までの撤退戦闘は進路周辺の高地はすべて敵の占領するところで、高所より谷間を通る我が部隊に加えられる銃火は熾烈を極め、多くの

犠牲者を出しながら反転を続けた。十七時五十分頃、薄暮となり敵銃火が少なくなった頃三又河付近に到着した。

この頃支隊本部に、我が軍の撤退した地域に負傷して残っている者がおるとの報告があり。支隊長は支隊に停止を命じ、早川軍医ほか二人に負傷者の収容を命じた。態勢を整えながら待つ間に、夕食の命令が出たが、相次ぐ激戦で興奮、疲れで食事もノドを通らぬ思いでした。敵の銃撃は執拗に繰り返され、とうとう早川軍医以下の収容隊は帰りません。更に一個分隊を派遣したが、予定地域は敵が充満して連絡取れず、敵は間近に迫り、支隊長はこれ以上現在地に居る事は再包围を受け、支隊全滅の公算があり誠に危険な状況となった。

支隊長は早川軍医以下の収容隊残留させる事の無念さが顔にありありとうかがえ、部隊全員のためとは言え胸中察するものがあつたが、出発命令を出された。十八時を過ぎても、辺りが闇となつ

ても敵の追尾は尚続いた。夜の反転は別命が無いのに、全くの静肅行軍で、小便をするにも両膝を地に着け音を出さないよう、軍馬も身震い一つしないで静肅行進であつた。

二十時過ぎた頃、敵の追尾を振り切り、やっと友軍と接触した。

本早朝来、軍司令部との連絡が取れず、反転作戦続行中の柄田部隊に軍司令部は大いに憂慮し、万一を懸念し、この部隊に柄田支隊収容のため、再出動を下命し今正に出発するところであつた由。

早速この部隊が用意してくれた夜食と湯茶のサービスを受け休止した。翌朝収容してくれた部隊と反転経路を打合せ、敵の追尾を警戒しつつ反転した。

撤退中、第二大隊（水野中尉）は敵から脱出できず戦死者も収容できぬ状態となり、部隊命により第五中隊が援護に当たり、前方の畔のようなど

ころの草むらに陣取り第二中隊を攻撃していた敵に向け二丁の重機で猛射、敵は重機の威力に忽ち沈黙した。

第二中隊が後退したので第五中隊も後退、部落の前方独立した一五〇メートル位の山があり、敵味方共大事な要所である。部隊長は第三中隊の金沢准尉の二個小隊にこの山の確保を命じたが、時すでに遅く敵の占領する所となった。このため部隊は、反転中この山の敵から眼下に見下され、射撃を受け随分と苦戦を強いられた。

こちらの山を前進して行く、向こうの山との間に水田があり、向こう側の斜面が急である。一度水田に降りなければ、向こう側の山へは上がれない。敵からは丸見え、射撃の的となる。敵は約一個師団の兵力で包囲し、じりじり包囲網を縮めてくる。そここに敵の姿が見え隠れする。

この頃負傷兵を收容に行った軍医以下の收容班はどうとう帰還せず、未だその消息は知られてはいない。

石門の戦い

昭和十八年十二月八日、出撃命令。早朝三時より裏山の掃討に出発。敵に察知されて十字砲火を浴びた。直ちに応戦。その戦闘で私と同じ名古屋出身で同じ字区にいた近藤庄吉さんが、右大腿部貫通銃創、出血多量のため四十分程苦しみながら名誉の戦死を遂げられた。遺体は山の稜線に近い所へ、合掌して葬り、小隊長が腕を半分切り持ち帰る。当時私は第一小隊擲弾筒分隊配属であったが、近藤戦友の戦死後第三小隊（金沢小隊）に移り、飯盒の菜入れに彼の遺骨を入れ三角巾で包み首にかけ、作戦終了まで一緒に行動した。

漢口で遺骨は遺品と共に、日本の遺族の元へ帰っていった。一緒に入隊、教育、討伐、作戦といつも同一行動をしていた戦友を失ったことは、悲しい思い出の一つである。

常德作戦

徐州―蚌埠―滁県―浦口―安慶―九江―漢口

—孝感—漢水渡河—江陵—沙市—松滋河（舟）

—石子灘—煖水街—新安—石門—羊毛灘

反転

羊毛灘—石門—新安—合口—雷家舖—揚林子

—松滋河渡河—沙市—漢口

以上独立歩兵第五十八大隊の戦歴である。

やがて昭和二十年八月十七日に終戦を知りました。一般の歩兵連隊とは異なり独立大隊には軍旗はなかった。戦闘は終わったかのような感じでも共産八路軍との戦闘が始まり、不幸にも戦死、負傷する者も出た。この無念さはどこへ訴えればよいのか。悲運の戦友の御冥福を深く祈つてやまない。終戦までの支那軍相手の損害（特に常徳作戦での犠牲者）も数多かつた。若し生命を日本のために、大陸に散華した戦友とその遺族に何と言えよ！と叫びたくなるのは独り筆者のみとは言えない。

さて帰国は徐州の東方黄海岸の蓮雲港より乗船し、昭和二十一年四月三日、佐世保へ入港上陸復員でした。

結婚 昭和二十二年二月二十二日

子供 女、女、男、計三人

孫 三人

妻 平成十一（一九九九）年八月二十六日

死亡

支那大陸戦線従軍の所感といえは

1、未経験の苦しきの体験に勝った。

2、へこたれず、頑張つてやる、との覚悟ができた。

きた。

3、戦後の食料不足その他の困苦欠乏に堪えて

やりぬいた。

以上の勝ち抜く攻撃精神を持ったこと。